

はじめに

奈良国立文化財研究所が平城宮跡の発掘事業をはじめて満30年、大極殿閣門前庭部で奈良時代の大嘗宮の遺構を明らかにすることができた。かって1965年の造酒司関連遺構の発掘で、聖武天皇の大嘗祭関連の木簡の出土をみたことから、いつかは大嘗宮遺構の発掘ができるのではないかと期待していた。1983年度の大極殿前庭の儀式用の仮設物遺構の検出は、それまでの宮内殿舎の発掘で得られなかった宮廷儀式の実態をまざまざと見せてくれるおもいがした。それにもまして即位儀式のなかでも最も重要な場を現実に発掘することができたのである。この一連の調査成果は、単なる宮殿の建物の配置の変遷を知るというよりは、その場で現実の儀礼に参加した古代人の息吹をじかにきくおもいがするもので、1961年の木簡の検出に匹敵する発掘の画期として永く記憶される年になるであろう。飛鳥地方における水落遺跡北部遺構の調査、その東北に隣接した石神遺跡で発掘した遺構は複雑の度合をましてきたが、まさに古代史を掘る実感をあじあわせてくれる興味のない資料を多く得ることができた。木簡の発掘では1966年に多量に出土した勤務評定木簡出土地の隣接地の発掘で、考課の実務をうかがわせる資料がさらに追加されたばかりでなく、種子島の官人の考課書類につけられた付札、肥後国第三益城軍団兵士歴名帳、出羽国郡司考課に関する軸の発見など、全国各地の下級官人、兵士にいたるまで、その実態を都で把握していたことを如実と知ることができた。

その他、「法隆寺昭和資財帳」関連の諸調査、近世社寺建築の調査、年輪年代学的調査、各種情報処理システムの研究、保存科学的研究、考古・庭園遺跡の調査指導、研究集会、埋蔵文化財センターの各種研修事業など多岐にわたる成果の一端をここに集録した。組織・予算の両面ともきわめてきびしい昨今、文化庁をはじめ各方面の御指導とはげましの中で研究所員一同がどのように働いているかを御理解いただければと考える次第である。

1985年12月

奈良国立文化財研究所長

坪 井 清 足